

## (二) 西福寺 (福山市神辺町川北)

西福寺は山号を普門山と号する高野山真言宗の寺院である。廉塾と近く、茶山は度々訪ねている。文化四年(一八〇七)の神辺大火により、悉く灰燼と帰した。しかし、本尊は火災の中から避難させて無事であったという。

一 西福寺の縁起 「福山市神辺歴史民族資料館ホームページ 神辺の寺院」によれば

現在の場所に慶長年間(一五八九〜一六一四)に奴可郡(ぬかぐん)中野村(現庄原市西城町)から「胎藏寺(たいぞうじ)」というお寺が移されますが、元和五(一六一九)年、福山藩主・水野勝成が福山に拠点を移し始めるのに伴い、福山城の鬼門鎮護のために城北の吉津(よしづ)現福山市北吉津)へと移されました。そして、その跡地へ川南の岩田から「平等寺(びょうどうじ)」というお寺を移し、その後「西福寺」と改称したといわれています。

文化四年(一八〇七)二月の神辺大火によって本堂をはじめとする大部分を焼失し、文化十三年(一八一六)に本堂、万延元年(文久二年(一八六〇)〜一八六二)に庫裏(くり)・客殿を再建します。神辺大火の際には、本尊それに過去帳だけは持ち出して難を逃れ、本尊は再建された本堂におさめられ秘仏とされました。寺伝では、山門だけが焼けずに残ったといわれています。



寺伝によると

水野勝成が福山城築城の際、神辺から多くの寺院が福山に移転させられている。この頃、国分寺(神辺町下御領)に寄寓していた僧審崇(しんじゆ)が、胎藏寺の跡地に平等寺(川南岩田)から移して、西福寺と号した。寺伝によると、水野家の支援があったのか、水野家の家紋「澤瀉」(おもだか)を附した瓦が残されているという。

神辺大火で堂宇を焼失したが、九世寂如上人が復興に努め、文化十三年(一八一六)本堂を再建したという。この寂如上人を中興の祖としている。

福山志料(菅茶山編纂)には

普門山真言宗明王院末寺福山城成就ノ後神邊ノ胎藏寺ヲ吉津へ移スコレソノ跡ナリ

と記している。

【ちよつと休憩】西福寺と寶泉寺(神辺町湯田村)

先に寶泉寺についてまとめた時、寶泉寺の法系図の中に「西福寺」の名前を見た。

西福寺九世寂如(神邊西福寺中興・福山土村田氏)、西福寺十世即如(徳田徳永氏、神辺西福寺)、西福寺十一世圓我(中條村人、神辺西福寺、尾道浄土寺、高野如意輪寺、前左学頭)

西福寺十二世良猷(寶泉寺十六世弘如・福山土梅田彌五六弟・高野龍華院)実兄、神辺西福寺これを見ると、寶泉寺から西福寺へ住職として赴くなど、二寺は近い関係にあったことがわかる。中でも、圓我上人は西福寺(尾道浄土寺)高野如意輪寺へ入った人で、高野山の学僧として活躍した上人とわかる。西福寺の先の住職一六世俊海上人も寶泉寺より赴かれている。

廉塾と西福寺は距離的にも近く、茶山は度々訪れていた。菅茶山略年表（菅茶山記念館発行）菅茶山（富士川英郎）等から拾ってみる。

年号	西暦	茶山の動静
天明三年	一七八三	7/15 道光上人と西福寺で賞月し詩を作る
五年	一七八五	拙齋・姫井・杏坪と西福寺詩会に赴く
六年	一七八六	3/24 拙齋・東嶼と竜泉寺・萬年寺・西福寺に遊ぶ
享和元年	一八〇一	春 西福寺で賞梅する（詩「西福寺賞梅」を詠む）
享和三年	一八〇三	8/16 晴。月佳し。武十・序平と歌を西福寺に作る。夜遅くして陰る 8/14 晴。西福寺上人・武十と歌を廉塾に作る。君推、酒肴を携えて来る。月明、晝の如し
文化八年	一八一一	8/18 序平と西福寺で賞月し歌を作る
文化十一年	一八一四	6/5 西福上人雛僧を携え来たる
文化十三年	一八一六	4/22 惠充と西福寺に登る 3/20 惠剛上人掬花西福寺 乞余看之

右表にある人物を紹介すると

○道光上人 日蓮宗出雲法恩寺住職。度々廉塾を訪れる。茶山の詩にもよく登場する。  
 ○拙齋 西山拙齋。備前鴨方の儒者。茶山の師であり、友である。度々訪ね会っている。  
 ○桃源 姫井桃源。備中鴨方生まれ。池田家儒官。池田家墓所・閑谷古巖の事を司る。  
 ○杏坪 頼杏坪。頼春水の弟、頼山陽の叔父。広島藩儒となり、後、行政官として活躍。  
 ○志村 志村東嶼。仙台藩儒官。昌平黌で經を講じたこともある。  
 ○武十 本荘屋菅波家（東本陣）第六代当主で菅波武十郎維廉。茶山の和歌の友。  
 ○序平 尾道屋菅波家第十代当主で菅波序平信恕。菅波信道の義父。  
 ○西福寺上人 上人の名前は定かでないが、中興の祖寂如と思われる。  
 ○君推 河相君推。西中条の庄屋で大富豪。客殿に十勝碑林という泉水をめぐらせた庭園を造る。茶山も詩友と度々訪れる。  
 ○惠充 寶泉寺惠充上人のこと。詩歌に秀でる。高野山へ上り座主となる。

茶山は廉塾を訪れた詩友や客と連れだって、西福寺を訪れ月や梅を賞し詩を詠んでいる。しかし西福寺上人の詩は見る事ができない。また、乗如上人（寶泉寺）靈昌上人（光蓮寺）如実上人（国分寺）大空上人（遍照寺）のように名前を挙げての詩も未だみられない。

三 西福寺にまつわる詩を紹介する

西福寺賞梅	西福寺賞梅	黄葉夕陽村舎詩 後編 卷六
品茶琢句坐斜陽	茶を品（ひん）し 句を琢（たく）して斜陽に座（ざ）し	
閑事偏知春日長	閑事（かんじ）偏（ひと）えに春日（しゅんじつ）の長（なが）きを知る	
暮鳥還棲驚有客	暮鳥（ぼちょう）棲（すみか）に還（かえ）り客（きやく）有るに驚く	
梅花花底小僧房	梅花（ばいか）花底（かてい）小僧房	

賞梅 梅を愛して楽しむ。 品茶 お茶の品定めをする。 琢 玉をみがくこと。 棲 すみか、ねぐら。 僧房 僧侶の住む建物。

(大意) 茶を楽しむ詩をひねり、夕陽が射すまで座っている。閑暇(かんか)を呑気に過ごすものには、まったく春の日は長い。小鳥がねぐらに帰って来て、客(茶山)がいるのに驚いたらしい。梅の花盛りにつつまれた僧房の一日に満足した。

西福寺門額

黄葉夕陽村舎詩 後編 卷三

菩提豈有岐 菩提(ぼだい) 豈(あに) 岐(き) 有らんや  
開示分悲智 開示して 悲智(ひち) を分つ  
能入正門來 能く正門より入り来らば  
便知其不二 便(すなわ)ち其の不二(ふじ)なるを知らん

菩提 悟りの境地に至ること 豈 どうして・だろうか 岐 分かれ道 悲智 慈悲と智慧。 正門 正しい信心の筋道、 便 すなわち 不二 唯一

(大意) 仏道の教えに二通りあるのだろうか。ただ分かりやすく慈悲と智慧に分けて説く。正しい信心をひたすら求めるならば、それが二通りでないことはすぐわかるだろう。

\* 書あり。文化八年(一八一二) 嘉平月(陰曆二月) 二六日の書いたものである。詩集では二行目の「開示」が「開似」とある。

元夜西福寺即事 新市常金丸 栗田豊説 黄葉夕陽村舎詩 前編 卷二	佳辰寂寞古僧房 佳辰(かしん) 寂寞(せきばく) たり 古僧房
豆粥留人興也長 豆粥(とうしゆく) 人を留めて 興也(ま) た長し	開歲忽經十五日 開歲(かいさい) 忽(たちまち) 經(へ) たり十五日
看棋聊盡兩三觴 看棋(かんき) 聊(いささ) か盡(つく) す 兩三觴(さんしょう)	子聲斷續春園靜 子聲(しせい) 斷続 春園靜かに
佛畫昏濛夜壁荒 佛畫昏濛(こんもう) 夜壁(やへき) 荒る	歸路梅花枝上月 歸路梅花 枝上の月
喜無燈市奮清光 喜ぶ燈市(とうし) の清光を奮(うば) う無きを	

元夜 正月十五日夜の民間行事、あずき粥を炊いて健康を祈る。 開歲 年が改まる。 看棋 碁を打つのを見る。 兩三觴 二〜三杯の酒、觴はさかずき。 子聲 碁石の音。 昏濛 くらくてさだかでない。 燈市 燈具を売る市

(大意) 新春の佳節、古風な僧房は静かに落ち着いている。豆がゆの接待で人々が多くとどまり更にいつまでも座興が続く。年が明けてもう一五日経った。碁を打つを見ながら二〜三杯やる。碁石の音が時折聞こえる外は物音ひとつしない春園。壁にかかった仏画もほの暗くさだかでない。帰路の道端に梅の枝を照らす月の光は、燈市の明るさが妨げぬほど、清らかに澄んでいる。

\* 燈市 燈具を売る市。古代中国では正月八日から一八日まで燈の市が立ったと言われる。照明の乏しい時代では、唯一の夜の華やかさであったろう。その明るささえ梅花枝上の清光を消さない程月光は鮮やかであるとの意

\* ここで詠まれている西福寺は、新市町金丸にある浄土真宗西福寺であるという説もある。理由は、



本堂前の詩碑

黄葉夕陽村舎詩に掲載されている詩が、「雪日至自桃谷（百谷）」（加茂町）↓「元夜西福寺即事」（新市町）↓「福盛寺」（駅家町）↓「柏谷途中」（新市町と駅家町の峠）の順になっており、茶山が吟行した際の詩とするなら新市町の西福寺であると考えられるという。

天明三年初秋 茶山は訪れた道光上人と西福寺で賞月をしている。道光上人はこの夜のこ  
とを思い出し、この詩を詠んで茶山に贈っている

七月十五日夜懷菅先生

釋日謙（道光上人）書

芙蓉池面印清規 芙蓉 池面 清規を印す  
獨對秋光多所思 獨り秋光に対して 所思多し  
西福會遊君記否 西福の會（か）つて遊ぶを 君記するや否や  
中元翫月與填詞 中元 月を玩（もてあそ）びて 與（とも）に填詞（てんし）せしを

芙蓉 はすの花

秋光 秋のけしき、秋の日光

中元 陰曆七月十五日

填詞 漢詩の一体。樂府から變化した歌曲の一種で、一定の譜面に合わせて、文字を填（う）めてつくるからという。

（大意） 蓮の花が池の水面に規則正しく浮かんで咲いている。獨り秋の穏やかな日差しに向い物思いに耽っている。曾て西福寺に遊んだことを覚えておられるでしょうか

福山志料の中に、西山拙齋の詩「過西福寺住僧不在」が記載されているので紹介する

不管山僧閑與忙 探梅看竹借禪床 爐頭半日吟詩去 滿院松濤滿鼎香

【ちよつと休憩】 小早川文吾は西福寺に眠っている

小早川文吾 天明二年（一七八二）〜明治十三年（一八八〇）

名を贗（おろか）、字景汲。文吾は通称。薇山、樂々翁、樂々齋と号した。父が医者であったことから医学を学び、茶山に入門し漢学を学ぶ。茶山没後、家業の医業を行いながら、私塾を開く。晩年失明したが、塾を続けた。七日市通の現在「天寶一」のあたりに居宅があった。現在、標柱が建てられている。絵画、詩、書ともによくした。作字学に通じ、天別豊姫神社豊姫には、彼の作字した文字「あかくに」が石に刻まれている



小早川文吾墓

## 参考文献

- |             |                    |
|-------------|--------------------|
| 福山志料上巻 復刻版  | 芸備郷土誌刊行会           |
| 黄葉夕陽村舎詩 復刻版 | 児島書店               |
| 神辺の寺院       | 福山市神辺歴史民族資料館ホームページ |
| 菅茶山上・下      | 富士川英郎              |
| 菅茶山略年表      | 案茶山記念館             |
| 西福寺         | 西福寺一七世俊明           |
| 菅茶山とゆかりの人々  | 菅茶山記念館             |